

<金融史パネル>

経常収支不均衡の認識論

——1960-70年代における対外均衡と対内均衡の歴史的位相——

報告：

森田泰子・神尾英克*（日本銀行）「1960年代末の日本銀行の認識と金融政策」

浅井良夫（成城大学名誉教授）「1970年代前半の日本の国際収支認識と金融・為替政策」

石坂綾子（愛知淑徳大学）「なぜドイツマルクは切り上げられたのか？

— 1960年代の経常収支不均衡についての歴史的経験 —」

討論者：

畑瀬真理子（日本銀行）

Catherine Schenk（オックスフォード大学）

座長・司会

矢後和彦（早稲田大学）

趣旨：

「ニクソン・ショック」から50年を迎えた現在、歴史研究の視点と方法から当該期を振り返ることが可能となり、また課題となっている。本パネルでは経常収支・国際収支の「不均衡」が当事国にどのように認識され、いかなる政策的対応に導いたのか、その成否はどのように評価されるか、という諸点をアーカイブ資料に基づいて解明することを目的とする。

パネルではとりわけ日本・西ドイツという「黒字国」に焦点をあてる。本来、ブレトンウッズ体制における対内・対外「均衡」の理念からは「黒字国」「赤字国」というカテゴリーは想定されていなかった。ところが1950年代からまず西ドイツ、次いで1960年代から日本がこうした「黒字国」として自他ともに認識されるようになり、「黒字国」としての役割を期待されてくる。その役割は、当初の「黒字削減」から、西側の成長の「機関車」へと展開し、「黒字国」に期待される政策的対応も、為替調整、マクロ経済調整、関税政策、さらには経済構造改革まで及ぶことになる。本パネルでは、日本銀行・ブンデスバンク等のアーカイブ資料および白書等の公刊資料に依拠しつつ、「黒字国」による経常収支不均衡の認識を歴史的に再構成し、政策的対応に至る論理構造を内在的にあきらかにすることを試みる。なお海外からのコメントについては録画による参加を予定している。